

社会政策学会第120回大会テーマ別分科会

「近代日本の女性労働」をめぐって

竹内 敬子

- 1 テーマ別分科会設定の経緯
- 2 ジェンダーと労働
- 3 近代日本の女性労働
- 4 今後に向けて

1 テーマ別分科会設定の経緯

2010年6月19日（土）および20日（日）の2日間にわたり、早稲田大学において社会政策学会第120回大会が開催された。大会第一日目、同学会のジェンダー部会および労働史部会の共催によるテーマ別分科会「近代日本の女性労働」が開かれた。谷本雅之（東京大学大学院経済学研究科）「近代日本における女性労働と『小経営』」、榎一江（法政大学大原社会問題研究所）「近代日本繊維産業労働史再考」の2本の興味深い報告がなされ、意義深い議論が交わされた。

詳細に入る前に、社会政策学会ジェンダー部会および労働史部会について若干の紹介をしたい。この2つの部会は、ともに1996年に結成された。これは、同学会による専門部会（当初は分科会）の再編成の提案にいち早く応じたもので、この2つの部会が他の部会にさきがけ結成されたことが、『社会政策学会Newsletter』No.8（1996年10月20日）で紹介されている⁽¹⁾。その後、ジェンダー部会については毎年の春期大会で、労働史部会については、ほぼ毎年、春期、秋期どちらかの、あるいは両方の大会で分科会を開催してきた。両部会とも大会での分科会開催以外にも、適宜、研究会や書評会の開催や関連情報の交換を行っている。

*編集注：本特集は、社会政策学会のテーマ別分科会「近代日本の女性労働」（2010年6月、於早稲田大学）を中心に企画された。当初の予定では、報告者である谷本雅之、榎一江両氏の論文に、この分科会を企画した竹内敬子氏の「特集にあたって」を加える構成であった。本稿が、社会政策学会の分科会をめぐって書かれているのはそのためである。その後、山田論文の寄稿を受け、本誌編集委員会の判断で本特集に組み込み、特集タイトルを「日本における女性労働の歴史」としたことを注記しておく。

(1) 『社会政策学会Newsletter』No.8, 1996年10月20日, 2ページ。<<http://www.soc.nii.ac.jp/sssp/nl8.pdf>>

この2つの専門部会は、数年前より共催でテーマ別分科会をもつことを検討していた。これが、120回大会においてようやく実現の運びとなった次第である。

2 ジェンダーと労働

労働および労働の歴史はジェンダー研究において重要な領域である。ある社会における生産労働と再生産労働のジェンダー間の分業、それぞれの内部におけるジェンダー間の分業は、その社会におけるジェンダー秩序の構築において決定的な役割を果たす。そのジェンダー秩序は多くの場合、階層的である。さらに、近年、急速に明らかにされつつあるように、ジェンダーと階級・階層、エスニシティなどの「差異」とが絡み合い生産、再生産の場は複雑なモザイク模様のような諸相を呈している。植民地主義、帝国主義、グローバリズムなどのうねりがある社会を席卷し、その諸相が大きく描き換えられたり、歪められたりもする。

いくつか例をあげよう。西ヨーロッパでは重商主義の時代には「新世界」を含むさまざまな地域からの珍奇な商品の流入が、ジェンダー化された新しい消費文化を生み出した。男性がコーヒーハウスで珍しい飲み物を飲みながら社交を楽しんだのに対し、女性は家庭で家族や友人たちと紅茶を飲んだ。この時期、富裕な階層の家庭においては女性が家庭外で労働することが不名誉になっており、女性が担うことになった家庭内での仕事は「家事」と定義されるようになっていた。富裕な階層の家庭における家事は、こうした新しい消費文化のために煩雑になったが、これらの家事を実際に担ったのは、女性家事使用人であった⁽²⁾。女性と男性の領域の分離が進展する一方で、階級を異にする女性たちの中で、無償で家事労働の管理をする者と有償でそれを実践する者の分離が起こったのだ。

外部との交易が社会の中のジェンダー秩序に変化をもたらした例をみてみよう。北アメリカ東部で17世紀初頭にネイティブアメリカンとヨーロッパ人との交易が始まった時、ヨーロッパ人が欲したのは毛皮であった。当時、ネイティブアメリカンの社会では男性が狩りを、女性が栽培を担っていたため、交易の商品として魅力ある毛皮を産み出す男性の労働への評価が上昇する一方で、女性の労働は以前に比べ重要なものとはみなされなくなってしまった⁽³⁾。

北米の例をもうひとつあげよう。1880年代のノース・カロライナの紙巻きタバコ工場では、黒人男性が梱包されたタバコの荷役を担当し、黒人女性がタバコの葉を機械に詰め、白人女性が機械を操作し、白人男性は機械修理や監督業務を担う、といったジェンダーとエスニシティによる分業が行われていた⁽⁴⁾。ジェンダーとその他の要素が組み合わせたり、階層性はしばしば労働の場で複雑な形で現れるのである。

労働史研究にジェンダーの視点が不可欠であることも、また言をまたない。アンナ・クラークが

(2) Marry E. Wiesner-Hanks, *Gender in History : Global Perspective*, Chichester, West Sussex, U.K., Wiley-Blackwell, 2011, second edition (first published by Blackwell, 2001), pp. 67-68.

(3) *Ibid.*, pp. 68-69.

(4) *Ibid.*, p. 69.

見事に描いたように、労働や労働者の世界は、ジェンダーと複雑に絡みあいながら構築されたからである。クラークは、E. P. トムソンの『イギリス労働者階級の形成』⁽⁵⁾を高く評価しながらも、それが「労働者階級の歴史の男性版」にすぎないことを批判する。彼女が試みたのは、そこに単に労働者階級の女性の歴史を付け加えるのではなく、「個人的なこと」と「政治的なこと」がいかにか有機的に結びついて労働者の「階級意識」が形成されたか、ということを経済的かつ立体的に明らかにすることである。

18世紀後半から19世紀にかけて、ジェンダーをめぐる「分離した領域 (separate spheres)」のイデオロギーが定着していく。政治という公的領域が男性に、家庭という私的領域が女性に割りふられたのである。しかし、このイデオロギーの実現は、労働者階級には無縁のものであった。労働者階級の男性は選挙権を付与されず、また、貧困ゆえ女性が外で働かずに家庭内にとどまることはとうてい無理であった。クラークによると、急進主義者による労働者階級の階級意識形成は、彼らの手には届かなかったこのジェンダー・イデオロギーを労働者階級にも普遍化するための闘いでもあった⁽⁶⁾。クラークはロンドンの熟練職人、ランカシャーおよびグラスゴウの繊維工業労働者を対象に取り上げ、彼らの階級意識の形成の過程を、ブロードサイトを含む多彩な史料を駆使して、また、家庭、地域社会などの広い文脈の中で色鮮やかに叙述し、ジェンダーの視点抜きに労働史を語る事が不可能であることを示したのである。

ジェンダーの「語り」は、国家の形成においても、帝国の形成においても、大きな役割を果たしてきた。長い間にわたって「自然なこと」「不変なこと」として信じられ、受け入れられてきた「生物学な性＝セックス」ですら、ジェンダーの「語り」が構築したことをジュディス・バトラーが喝破したことは我々に衝撃を与えたが⁽⁷⁾、これは、ジェンダーの「語り」がいかに強烈な力を持つかということを経済的に物語っている。社会政策の策定や労働運動の組織化もジェンダーの「語り」を梃に進展してきたし⁽⁸⁾、「労働」「仕事」「熟練」の定義もジェンダーの「語り」と深く関わっている⁽⁹⁾。このたびのジェンダー部会と労働史部会のコラボレーションは、こうした学問状況から必然的に導き出されたものでもある。

3 近代日本の女性労働

上記を踏まえた上で、社会政策学会ジェンダー部会と労働史部会は、分科会のテーマを「近代日

(5) E. P. Thompson, *The Making of English Working Class*, Harmondsworth, Penguin, 1991, revised edition, first published in 1963. 邦訳は、エドワード P. トムソン著、市橋秀夫、芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年。

(6) Anna Clark, *The Struggle for the Breeches : Gender and the Making of the British Working Class*, London, Rivers Oram Press, 1995, pp. 1-2.

(7) Judith Butler, *Gender Trouble : Feminism and the Subdivision of Identity*, London, Routledge, 1990, pp. 8-10.

(8) Robert Gray, *Factory Question and Industrial England, 1830-1860*, Cambridge, Cambridge University Press, 1996, 竹内敬子「工場法とジェンダー—1911年工場法と女性をめぐる「仮説」の受容」、三宅義子編『日本社会とジェンダー』（叢書現代の経済社会とジェンダー）明石書店、2001年、など。

(9) Wiesner-Hanks, *op. cit.*, p. 70.

本の女性労働」と定め、榎一江および谷本雅之の両氏に報告を依頼することになった。

日本においてもジェンダー視点からの労働史研究は、近年、少しずつ広がりや深まりを見せている。日本をフィールドにした研究においても、繊維産業の女性労働者中心の研究から石炭業その他の産業で働く女性や、女中や「看護婦」といった職業へと少しずつ研究対象が広がってきている⁽¹⁰⁾。さらには、男性性 (masculinity) を射程に入れた研究も始まりつつある⁽¹¹⁾。植民地におけるエスニシティとジェンダーの問題への取り組みも見られる⁽¹²⁾。この分科会では、こうした近年の研究の地平をさらに広げることを試みたものである。榎一江氏の「近代日本繊維産業労働史再考」は、わが国の工業化を牽引した繊維産業の「基幹労働力」であった女性たちの労働を経営との関係でより有機的に明らかにすることを目指したものであり、谷本雅之氏の「近代日本における女性労働と『小経営』」は、これまでの研究では可視化されていなかった当時の日本の女性労働の過半を占めた小経営内の女性の労働に焦点をあてたものだ。この2つの報告によって、労働市場という「表舞台」での女性たちの労働と、生産に大きく貢献しているにもかかわらず長らく研究の対象とされてこなかった小経営の女性たちの労働を取り上げることによって、私たちの近代日本の女性労働への理解を一步進め、総体的により大きな文脈の中で理解することが目指されたのである。以下、2つの報告をごく簡単に紹介しよう。

榎氏によれば、繊維産業の大企業で、生産において基幹的役割をになった女性労働者に対する独特の労務管理が成立したのは、戦間期であった。この労務管理の成立の過程や変化が、労働市場、地域社会の文脈の中で詳細に分析され、「工場労働と家事労働の相克」という重要な論点が提示された。

クラークはイギリスの工業化におけるジェンダーの重要性を指摘する。新しい労働規律も、新しい問屋制のネットワークも、新しい工場という組織も女性や子どもが最初に体験し、しかも、綿産業に典型的に見られるように、工場で働く女性や子どもの生産力は、男性の熟練手織工のそれをはるかにしのいだ。にもかかわらず、トムスの『イングランド労働者階級の形成』は、この圧倒的な女性労働者を抱える繊維産業の分析を巧妙に避け「男性労働者＝労働者」としてこの名著を書き上げてしまった⁽¹³⁾。日本においても、榎が指摘するように繊維工場で働く女性たちの作る製品は国際競争力を持ち、彼女たちの労働が日本の工業化を牽引したのだ。にもかかわらず、日本の労働史はいまだ男性労働者中心の研究が過半をしめるのが現状であろう。クラークがしたような労働史の書き換えの作業が我々に求められている。榎氏の報告はその一翼を担うものだ。

(10) たとえば、Kayoko Yoshida, "Invisible Labor : A Comparative Oral History of Women in Coal Mining Communities of Hokkaido, Japan, and Montana, USA, 1890-1940" in Jaelyn J. Gier and Laurie Mercier ed., *Mining women : gender in the development of a global industry, 1670 to 2005*, N.Y., Palgrave Macmillan, 2006, 清水美和子『「女中」イメージの家庭文化史』世界思想社、2003年、高橋彩「看護職と国家—ロックフェラー財団による戦間期公衆衛生改革事業の考察」氏家幹人他『近代日本国家の成立とジェンダー』柏書房、2003年、など。

(11) 宮下さおり「戦後日本の労働者家族とマスキュリニティ：活版工の職業・生活史調査から」社会政策学会第104回大会自由論題報告、2002年5月6日、於日本女子大学。

(12) 金戸幸子「〈境界〉から捉える植民地台湾の女性労働とエスニック関係—八重山女性の植民地台湾への移動と「女中」労働との関連から」『歴史評論』(772) 2010年6月、19-33ページ。

(13) Clark, *op.cit.*, p. 2 and p. 5.

繊維産業の大企業による女性労働者に対する独特の労務管理の中で、生身の「女工」や「教婦」たちが何を感じていたのか、榎氏は彼女たちの手記などを利用しつつ、垣間見せてくれた。ミリアム・クラックスマンの研究は、マンチェスターおよびその周辺で綿工場での仕事を結婚後も継続した女性たちと、必要に応じてカジュアルワークで家計を補った女性たちを比較しながら、彼女たちがどう自分たちの仕事をとらえていたか、を明らかにした。この研究は1990年代のオーラルヒストリー的手法による調査をもとにしたものである。ちなみに、社会政策学会労働史部会は、今年5月に行われた社会政策学会第122回大会でテーマ別分科会「オーラルヒストリーによる労働史の可能性」を開いた。今後、オーラルな史料も駆使した研究を組織していくことが私たちに課されていると思う。

谷本氏の報告は、数量的には女性就労人口の過半を占めながらも、近代日本の女性労働史研究の対象とされる機会の少なかった農家を含む小経営世帯内の女性労働のありようを分析し、それがその後の女性労働の歴史に付与した性質を検討した。

ヨーロッパにおいては、資本主義は中世ヨーロッパの農業システムを基盤に発展した。その農業システムの中にはジェンダー秩序も含まれる。中世ヨーロッパにおいては「労働の家族化」が進展し、夫婦を中核とした労働ユニットが確立した。多くの都市では13～14世紀頃からクラフト・ギルドが形成され始める。ギルドの規制に従って徒弟期間を勤め上げた職人が結婚すると、それは、仕事の助手を獲得したことも意味した。妻は妊娠・出産を繰り返し、育児をしながらも、常に助手としての役割を果たし続けた。15～16世紀には、親方からの自由を求める職人達の動きによって、ギルド規制は緩み始める。この時期、男性成員のみから成るギルド、女性の働き手がほとんどいないギルドがより「名誉ある」ギルドと認識されるようになる。このジェンダー関係は、ギルド外の雇用に対しても適用されるようになり、前述のように、女性の家庭内での仕事はそれが生産労働の要素がある場合でも「家事」と定義されるようになっていく⁽¹⁴⁾。工業化後の労働がそれ以前の社会のジェンダー関係を引き継ぐという点や、小経営内での家事と生産労働の関係など、谷本氏の研究と通ずる部分があるのではないだろうか。

レオノーレ・ダヴィドフとキャサリン・ホールの研究があきらかにしたように、18世紀から19世紀にかけて勃興しつつあったミドルクラスの家庭の妻たちは、単に「分離された領域」のうちの私的領域に封じ込められていた訳ではない。家庭は夫たちのビジネスの重要な基地でもあった。妻たちは自分の親族のコネクションを夫のビジネスに有利に取り結ぶなどの形で、夫の公的領域での活動に実質的な利益をもたらすことも多かったのである⁽¹⁵⁾。これも、谷本氏の研究対象より少し上の階層が対象となっているとはいえ、必ずしも表舞台には出ない形での女性の富の生産への貢献という点について、日本を対象とした研究を進める上で多くの示唆を含んでいるといえよう。

ヨーロッパの経験と日本の経験は共通する部分も多々ありそうである。今後、日本より先に工業化した国々のケースとの比較や、逆に日本より後に工業化した国々との比較も有益であろう。

(14) Wiesner-Hanks, *op. cit.*, pp.66-67.

(15) Leonore Davidoff and Catharine Hall, *Family Fortunes : Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*, London, Hutchinson, 1987.

4 今後に向けて

社会政策学会第120回大会におけるジェンダー部会、労働史部会共催のテーマ別分科会「近代日本の女性労働」は、実り多い、意義深いものとなった。しかし、日本におけるジェンダー視点からの労働史研究は、まだまだ十分にやりつくされているとは言えない。いまだ手つかずの産業も多いし、資史的にももっと多彩なものが使われるべきであろう。この特集の山田論文のテーマとも重なるが、クリストファー・ガーティスの日本の戦後労働組合運動に関する研究は、同盟機関誌の漫画なども駆使した分析をしていて興味深い⁽¹⁶⁾。ジャネット・ハンターなどによるすぐれた著作の出版があいつぐ中⁽¹⁷⁾、海外の日本研究者との交流などもおおいに奨励されるべきであろう。

やり残した課題については、今後ともジェンダー部会と労働史部会で共催の研究会や共同研究を組織するなどして、積極的に取り組んで行きたいと思っている。

(たけうち・けいこ 成蹊大学文学部教授)

(16) Christopher Gertis, *Gender Struggle: Wage-Earning Women and Male-Dominated Unions in Postwar Japan*, Cambridge, Massachusetts and London, Harvard University Asia Centre (distributed by Harvard University Press), 2009.

(17) ジャネット・ハンター『日本の工業化と女性労働—戦前期の繊維産業』有斐閣, 2008年。